

◎ 2016年度同門会奨励賞受賞



滋賀医科大学 心臓血管外科

木下 武 (平成 16 年卒)

このたびご評価いただいた論文は慢性腎臓病患者に対する冠動脈バイパス手術のグラフト選択に関する研究成果であり、2015年8月のアメリカ胸部外科学会雑誌 (Off-pump bilateral skeletonized internal thoracic artery grafting in patients with chronic kidney disease. Kinoshita T, Asai T, Suzuki T. J Thorac Cardiovasc Surg. 2015 Aug 150(2); 315-21) に掲載されました。

冠動脈バイパス手術は、心筋還流を担う冠動脈に生じた狭窄病変により虚血状態に陥った領域に、同一個体から採取した血管グラフトを用いて血行再建を行う手術です。血管グラフトとして内胸動脈、橈骨動脈、右胃大網動脈、大伏在静脈の4種類が存在し、これらを様々な組み合わせで用います。冠動脈(前下行枝、回旋枝、右冠動脈)が支配する3つの還流領域のうち、心機能と予後の最も影響を与える前下行枝領域に対して長期開存性に優れる内胸動脈グラフトを用いることは必須の選択になってはいますが、そのほかグラフトの取捨選択は外科医によって大きく異なります。冠動脈バイパス術は心臓外科の中で最も症例数が多い手術であり、グラフトの組み合わせ、採取方法、吻合血管の選択などが生命予後に影響し得るため、これまで多くの臨床研究がなされてきた研究分野です。

一方、慢性腎臓病 (chronic kidney disease、CKD) は冠動脈疾患の発症と進展に深く関与し、かつ強力な予後不良因子であることが示されています。CKD有病者の急増に伴い、当施設で冠動脈バイパス手術を受ける患者の半数近くが軽度から中等度のCKDを合併しています。また近年の研究によってCKD患者においては冠動脈バイパス手術で全ての虚血領域に血行再建を行っても生命予後が悪いことがわかっており、CKD患者の成績不振の原因究明と対策立案が急務とされていました。本研究は、開存性に優れた内胸動脈グラフトを2本使用することを軸にしたバイパス手術がCKD患者の生命予後に与える効果を検証したもので、類似研究がこれまで存在していなかった点が査読委員に評価されたのだと考えています。

心臓血管外科教室では多くの若手医師が臨床と研究の両立を目指して努力しています。1日も早く執刀医になることだけを夢みてひたすら臨床に打ち込んでいる若手外科医にとってわざわざ苦勞して論文を書くことの意義は何なのか。ひとつは故きを温ねて新しきを知る精神だと思っています。仮にNeuesを見出せなくても、膨大なデータを丹念に真摯に振り返る作業自体が外科医としての糧になるはずです。滋賀医大の過去2000例の冠動脈バイパス手術を詳細に知り尽くしておくことは、仮に自分が執刀していなくても極めて貴重な経験になるはずです。二つめは論理的思考の鍛錬に有用である点です。この思考技術は日常臨床で常に要求され、鑑別診断、診療方針の選択・実行などで活用されています。刻々と状況が変化する術中に、常に安全な最短経路を論理的に取捨選択する能力、合理的に判断する能力が良い手術に結び付くと考えています。最後に英文で論文を世に残すことができれば、現時点では少しの価値しかなさそうな論文でも、もしかしたら世界中の誰かが研究を発展させ素晴らしい治療方法に発展させてくれるかもしれません。心臓外科の歴史もそんなことの積み重ねだったようです。